

明治九年の海軍兵学寮競闘遊戯会と東京在留外人の「アスレチックスポーツ」

木村吉次*

‘Athletic Sports’ at the Imperial Naval College in 1876 and ‘Athletic Sports’ for Foreigners in Tokyo

Kichiji KIMURA

Abstract

The purpose of this study was to clarify the developmental process of ‘Athletic Sports’ from the 1874 meeting of the Imperial Naval College to the 1883 meeting of Tokyo University. Official documents of the government in the National Archives and articles of the Japan Weekly Mail were analyzed.

Results of this study were as follows :

- 1) It was ascertained that the Imperial Naval College held ‘Athletic Sports’ on April 7, 1876.
- 2) Although most of the events were the same as those in 1874, Japanese officials of the college also joined the committee for the meeting and Japanese Fencing was added to the program. Thus the meeting was somewhat “Japanized” this time. Moreover, it must be noted that events including casualness and uncertainty, such as a blindfold race, a flat race with a bucket of water on the head, and a flat race to pick up 20 eggs, were not adopted in 1876.
- 3) The same site was used for ‘Athletic Sports’ by foreigners’ athletic organizations, i. e., the Tokyo Amateur Athletic Association in 1876 and the Tokio Athletic Club in 1877 and 1878. The Parade Ground being at the disposal of the athletic organizations by the Naval Department, the attendance of the band of the Imperial Japanese Marines, and the participation of the cadets of the Imperial Naval College suggest that there was a close relationship and that the organizations were supported by the Naval Department and the Imperial Naval College.
- 4) F. W. Strange who taught English at Tokyo English College, later the Preparatory Course of Tokyo University, was an active member of those organizations. He also participated in the various meetings and matches held by foreigners’ sports organizations in Yokohama. With his rich experiences in administration and participation, he worked for the introduction of ‘Athletic Sports’ at Tokyo University. From the viewpoint of sports history he was in fact a mediator between ‘Athletic Sports’ of the Imperial Naval College and that of Tokyo University.
- 5) Before the meeting of Tokyo University, F. W. Strange published a booklet, the title of which was

*教授

“OUTDOOR GAMES”. It aimed to give some information on the outdoor games to Japanese students to induce them to keep their health. The program of ‘Athletic Sports’ was composed of the same events as those cited in the booklet except for the three-legged race. It showed the exclusion of the events including casualness and uncertainty while the later Gymnastics Exhibition included some of those events, which became indispensable items for school *undokai*.

〔1〕問題の所在

従来、運動会および陸上競技会の歴史にふれるとき、その最初に位置するものとして1874（明治7）年3月海軍兵学寮で行われた「競闘遊戯」（以下では通常の呼称「競闘遊戯会」を用いる）を最初とし、これに次いで1878（明治11）年5月札幌農学校で実施された「遊戯会」が挙げられ、それがさらに1883（明治16）年6月東京大学で開かれた「運動会」につながるものとされ、こうして陸上競技会に発展していく方向をたどるとされてきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾。しかしながら、この海軍兵学寮「競闘遊戯会」——札幌農学校「遊戯会」——東京大学「運動会」の順序で語られるものが、そのまま直接的な繋がりのあるものとしてその詳細が明らかにされているというものではない。その叙述の内容に立ち入ってみると、それらはただ時間的な順序で並べられているだけで、それら相互の間の関連については何ら述べられていないことが明らかになる。

筆者は、海軍兵学寮の競闘遊戯会について論究した際に、この競闘遊戯会や札幌農学校の「遊戯会」が後の1890年代から1900年代の時期に定型化が起こったとされる日本の学校運動会の成立にどのように繋がるものであるかを明らかにすることが今後の課題であるとしていた⁹⁾。ここでは上述のような問題の所在を確認して、1874（明治7）年の海軍兵学寮の競闘遊戯会実施のあと、競技会・運動会の初期的形態のものがどのように展開したかを考察しようとするものである。したがって、この課題の遂行は、運動会の成立に至る過程の空白部の一部を埋めるものになると期待されるものである。

〔2〕明治9年競闘遊戯会の実施

1874（明治7）年3月21日海軍兵学寮でダグラス（A. L. Douglas）中佐以下のイギリス海軍顧問団教師たちの指導の下に初めて競闘遊戯会を開催したことは、これまで体育史・スポーツ史・陸上競技史関係書の多くのものでとりあげられてきた。しかし、この1874年の「競闘遊戯会」のその後のことについてはほとんどふられていないか¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾、またふれている場合には「……英国海軍士官の在任が二カ年にして終わったので此回限りで、その後行われた記録はない」¹³⁾とする記述を踏襲したものである¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾。

海軍兵学寮の競闘遊戯会に関して最も信頼できる叙述をしているのは、1874（明治7）年1月7日海軍兵学寮予科に入学して、3月21日の競闘遊戯会に実際に参加した沢鑑之丞である。沢が競闘遊戯会について述べているものにも、この後に行われたことに関する記述は見られない¹⁷⁾¹⁸⁾。

しかし、「太政類典」に以下の二件の文書¹⁹⁾が残されている。

四月一日 九年（原文では九年の文字を矩形の枠で囲んだ印一筆者）

海軍生徒競闘遊戯ヲ施行ス

海軍省届

当省兵学寮等ニアル生徒ノ儀ハ日夜勤学イタシ候ニ付人体ノ健康ヲ養成候為メ一昨七年甲三套第四百五十七号ヲ以テ御届致シ候通り戯場ヲ被設度教師英国准艦長ジョンス申出ニ依リ来ル七日兵学寮外操練場ニ於テ別紙番付ノ通生徒競闘遊戯興行致シ内外国人縦覧差許候條此段御届仕候也 四月一日別紙略ス（原文割書一筆者）

海軍省達 院省史

記三套第三十一号

当省兵学寮前操練所ニ於テ兵学寮ノ生徒ヲシテ
来ル七日別紙番付ノ通競闘遊戯興行候ニ付内外
人民縦覧差許候條此旨為御心得及御回達候也
別紙略之（原文割書一筆者）

記三套第三十一号ハ九年ナリ

この二つの文書によって、この競闘遊戯に関して以下の諸点が明らかになる。1) 海軍兵学寮では1876(明治9)年4月7日に競闘遊戯会を開催することになっていた。2) 「人体ノ健康ヲ養成候為メ……」と生徒の健康を目的としていたこと、「別紙番付ノ通」とあるようにプログラムが作成されていたこと、さらに、「内外国人縦覧差候許條……」と、やはり外部に広く参観を許可したことなどの点は第一回同様であったことが明らかである。3) 参加者は、「海軍省達」では「兵学寮生徒ヲシテ……」となっているが、届の方は「兵学寮等ニアル生徒ノ儀ハ……」であったことから判断すると、第1回のときのように兵学寮以外の学校の生徒も参加していた可能性が考えられる。4) 会場は、構内の馬場にクリケット場を設置したところで行った第1回のときと異なって、兵学寮前(構外)の操練場に変更されている。

ところで、この海軍兵学寮の競闘遊戯会が1876(明治9)年4月7日に実施されたかどうかは、公文書の記録によって確かめることができない。しかし、当時の英字紙 The Japan Weekly Mail の1876年4月8日号は、'YEDO NAVAL COLLEGE Athletic Sports' の見出しでこの競闘遊戯会のことを次のように報じていた²⁰⁾。

金曜日海軍兵学寮の生徒のみならず首都にある仲間の学校——すなわち三菱商船学校や開拓使仮学校——の生徒たちも、話題にし、思いをはせてきたその競闘遊戯会が兵学寮前の、門跡寺(本願寺一筆者)に隣接した操練場で実施された。

この記事によって、それは4月7日金曜日に予定通り行われたことが確かめられる。

[3] 明治9年海軍兵学寮競闘遊戯会の内容

次に、明治9年の競闘遊戯会の内容を前節で引用したのと同じ記事に基づいて明らかにしよう。

1) 先ず、この競技会の組織に関してみると、兵学寮の教官、とくにイギリス海軍顧問団長ダグラスの後任となったジョーンズ(Charles William Jones*), Captain Motiyama(本山漸中佐?#), Captain Haiyasi(林雅昭少属・製図係?#)が世話をしたことに触れられている。そして、Lieutenant E. Etzuki(石崎安蔵?#), セントジョン(Edwin St. John 二等水夫長*), チップ(William Henry Chipp 水夫長属*), ハモンド(Frederick William Hammond 掌砲長属*), ベイリー(Charles William Baillie* — The Japan Weekly Mail 紙では Mr. Bailey)が審判および計時係(timekeeper)を務めたとしている。[*を付したのはユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』小学館、1975年を参照。#を付したのは海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』1919年刊、原書房、復刻版、1968年を参照。]

Captain Motiyama, Captain Haiyashi の両名と Lieut. Etzuki 以下の5名とで世話役会(The Committee)が構成されていたことも記されている。こうして、第1回のときのダグラスの役をジョーンズが果たしているが、日本人教官 Captain Motiyama と Captain Haiyashi も積極的に関わっていること、そしてセントジョンとチップは第1回同様審判をしているが、今回は Lieut. Etzuki も加わるなどして、全体として日本人教官の関与が一步進んだことが窺われる。

2) 参観者・来賓を収容するためテントが用意され、茶菓が出されている。イギリス公使パークス(Harry Parkes)がこの競闘遊戯会を参観しているが、数人の婦人もまた来場している。

3) 賞品が与えられたのは前回と同様であるが、兵学寮の教官(原文では officers なので士官と訳せるが、ここでは広義にとっておく)の

寄付金によって用意された。前回賞品は一切海軍省からの給与であったとされている²¹⁾。

4) 今回も海軍軍楽隊が出場し、会の進行を活気づけている。

5) この競闘遊戯会の競技種目は、表1のプログラムに見られる通りである(原文には各種目毎に入賞者名および記録——一部の種目に関して——が掲げられているが、ここでは省略する。)なお、比較のため明治7年の競闘遊戯会のプログラム(英文)²²⁾の競技種目を右欄に掲げよう。両者の比較によって、明治9年の競闘遊戯会の相違点が明らかになる。

上に掲げたプログラムを比較してみると、次

のような事実が判明する。

☆新しく採用された種目(5種目)

2. 300 ヤードハードル

8. 450 ヤード徒競走

10. 剣術

15. ハンマー投げ

17. 綱引き

★前回の種目で今回不採用のもの(5種目)

8. 負ぶい競走

10. 競歩

11. 目隠し競走

16. 水運び競走

17. 卵拾い競走

表1 明治9年プログラムと明治7年プログラムの比較

明治9年のプログラム	明治7年のプログラム
1. Flat Race for Students under 15 years, Dist. 100 Yards.	1. Flat Race for Students under 15 Years, Dist. 300 Yards.
2. Hurdle Race for Students over 15 years, Dist. 300 Yards.	2. Flat Race for Students over 15 years Dist. 600 Yards.
3. Flat Race for Students under 12 years, Dist. 150 Yards.	3. Flat Race for Students under 12 Years, Dist. 150 Yards.
4. Long Jump.	4. Long Jump.
5. High Jump.	5. High Jump.
6. Throwing the Shot.	6. Throwing the Shot.
7. Three Legged Race.	7. Three Legged Race.
8. Flat Race for Students over 15 years, Dist. 450 Yards.	8. Flat Race for Students over 15 Years to carry a Student over 10 Years, Dist. 200 Yards.
9. Pole Jump.	9. Pole Jump.
10. Japanese Fencing.	10. Walking Match.
11. Hop, Step and Jump.	11. Blindfold Race, Distance 50 Yards.
12. Steeple Chase for all Commers Dist. 300 Yards. N B Restricted to those belonging to the Naval Department.	12. Hop, Step, & Jump.
13. Catching a Pig by the Tail (Time allowance) no Pig no Prize (Can start twice)	13. Steeple Chase for all Children, Dist. 300 Yards. N B Restricted to those belonging, to the College.
14. Three standing Jumps (Feet to be close)	14. Catching a Pig by the Tail (Time Allowance) no Pig no Prize (Can be started twice)
15. Throwing Hammer.	15. Three standing Jumps.
16. Pig with the Greasy Tail.	16. Flat Race with a Bucket of Water on the Head, the one that brings back the most Water in the shortest time to be the Winner, Dist. 50 Yards.
17. Tug of War.	17. Flat Race to pick up 20 Eggs one yard apart, the Last Egg to be 40 yards from the Winning Post (Time & Eggs to count) Distance 200 Yards.
	18. To finish with the Pig being caught if not caught before.

○同じ種目（9種目）

3. 4. 5. 6. 7. 9. 11. 13. 16.

◎距離、参加資格など一部変更したもの（3種目）

1. 12. 14.

このようにみると、17種目中11種目が前回と同じか一部変更の種目であったことからすると、大部分は同様前回同様であったとみられようが、徒競走の距離が短縮されたこと、後の運動会の必須種目「綱引き」が入ったこと、日本在来の「剣術」が取り上げられたことなどが注目される場所である。こうして、二度目の競闘遊戯会の経験は、運動種目の多様化と日本化の試みとなって現れていた。また、よく注意してみると前回行われた負ぶい競走、目隠し競走、水運び競走、卵拾い競走などが今回取り上げられなかったことは、全体としてみたとき、偶然性、不確定性をもった種目が減少させられたという重要な変化があったことが分かる。

6) 競技の実際においては、生徒の「はにかみ」が見られたという。The Japan Weekly Mail 紙の記者は「今回が最初というのではなかったけれども、生徒には全く珍しいものと映り、外来の観客の前で生徒の内気が災いして、本当の力や技を発揮できなかった者が多く、このはにかみこそ二年前の回目の競闘遊戯会以来取り除こうとしてきたがだめだった」と指摘していた。そして、記者はまた、生徒たちがフランス式体操のより一層難しい離れ技もやり遂げるような柔軟性、敏捷性、レディネスをもっていることは、発達させられるべき潜在的能力のあることを示している、その発達には現在日本人教官が現在払っている以上に注意を払わなければならないものであるが、一般的には「健全な身体」をないがしろにして、不健康な知識の詰め込みを行っている、と日本人教官の教育を批判的にとらえ、体育の重要性を論じていた。

ともあれ、日本人学生が「はにかみ」あるいは「内気」といわれるように、参観者の視線を集めて身体および身体運動を展覧するイギリス流の Athletic Sports の方式になれず、身体運動によって身体を解放することが出来ないでい

る様子が捉えられていることは興味深い点である。

ところで、海軍兵学寮の競闘遊戯会が1876（明治9）年4月7日に上述したように実施されたことは確認できるが、その後これがどのように受け継がれていったのかを知る史料は、残念ながら目下のところ見出せない。この史料の発掘とそれに基づく競闘遊戯会のその後の展開の追跡が今後の課題として残さなければならない。

[4] 東京アマチュア・アスレチック協会の競技会

The Japan Weekly Mail 紙の通信員の記事によると²³⁾、明治9年海軍兵学寮の競闘遊戯会が開催された翌月、すなわち同年5月13日(土)午後、競闘遊戯会があったと同じ場所、本願寺に隣接した海軍「操練場」で「東京アマチュアアスレチック協会」(Tokio Amateur Athletic Association, T. A. A. A. と略す)の会員による春季大会(Spring Meeting)が開催されていることが知られる²⁴⁾。

1) 会場が海軍の操練場であったことの他に、海軍軍楽隊が出場して景気づけをしていること、海軍兵学寮生徒も競技に参加していたことなどを考えると、この競技会は海軍省との関係が深いことが窺われる。

2) この競技会の役員(Committee men)は、G. Charlesworth, W. Dillon, J. Hall, C. W. Lagden, W. B. Mason, F. Prowse²⁵⁾, F. W. Strange(secretary), J. Johnston(treasurer), W. F. B. Sams(starter), E. St. John(judge)らであった。この中で、審判員の役を務めたセントジョンは、海軍兵学寮のイギリス海軍顧問団教官の一人(二等水夫長)で、明治7年と明治9年の競闘遊戯会ですでに審判に当たっていた者である。東京大学予備門の英語教師で学生にスポーツを指導し、東京大学における運動会の開催に大きな役割を果たすことになるストレンジ(F. W. Strange)がここで幹事という実質的に最も中心的な役割を果たしていたことも注

目に値する。

3) 競技種目と競技結果(優勝者名または入賞者名)が掲げられているので、表2に示す。なお、The Japan Weekly Mail紙では番号を付していないが、ここでは付けておく。また、横浜居留地のイギリス人たちの間では、1864年頃すでに競技会を始めていたことが知られるが、それは、より娯楽性の強いものであったが、その後は次第に競技性を強めたものに変化しながら継続されてきた。ここで比較のため1874年10月30・31日に行われた横浜アスレチック協会(Yokohama Athletic Association, 以下Y. A. A. と略す)秋季大会の種目を右欄に掲げることにする²⁶⁾。それらの中には、予選・決勝が行われているものもあるが、ここではそれらは一種目として示す。

以上の1876年T. A. A. A. 春季大会の競技種目を見ると、人力車競走を早速取り入れたようなユニークさもみられるが、全体として9種目は共通である。他にも競走の距離の違いだけ

というものもあるので、大部分は同じ様な種目であったと言える。ただし、1874年Y. A. A. 秋季大会と較べたときには、それよりさらに競技性を強めていることが分かる。後者にはまだサックレースのような娯楽的種目が残されているのに、前者には見られない。明治9年の海軍兵学寮の競闘遊戯会の場合には、二人三脚、豚の尻尾つかみ、綱引きなどが入っていた。しかし、1876年横浜アマチュアアスレチック協会(Yokohama Amateur Athletic Association, 以下Y. A. A. A. と略す)の秋季大会²⁷⁾となると「クリケットボール投げ」や「ウィケット当て」が入っていたが、サックレースはなくなり、ここでも競技性が強まったことが窺われる。結局、この時期Athletic Sportsという用語で捉えられていたものが遊戯会的なものから競技会の方向に向かって進んだことが見られるのである。ただ、T. A. A. A. の会員は、横浜の居留地のイギリス人と同じくスポーツを愛好し、スポーツクラブを組織してスポーツ活動を行う生

表2 T. A. A. A. とY. A. A. の競技会種目の比較

1876年 T. A. A. A. 春季大会	1874年 Y. A. A. 秋季大会
1. Throwing the Cricket Ball — Strange.	1. 100 Yards Flat, Handicap.
2. Long Jump — Charlesworth.	2. Drop Kick with Foot Ball.
3. Flat Race, 100 yds. — Peacock.	3. 150 Yards Flat, Handicap.
4. Throwing the Hammer — E. Dillon.	4. Half Mile Flat.
5. Hop Step and Jump — E. Dillon.	5. Hurdle Race, 120 Yards, over 10 Flights
6. Flat Race, 150 yds. — Aberdeen.	6. Putting the Shot, 16 lbs.
7. Putting the Shot — W. Dillon.	7. 440 Yards Flat, Handicap. Ladies' Purse
8. Flat Race, 200 yds. — Peacock.	8. Hop, Step, and Jump.
9. High Jump — E. Dillon.	9. 1 Mile Flat.
10. Hurdle Race — Charlesworth.	10. Long Jump.
11. Pole Jump — Charlesworth.	11. 200 Yards Flat, Handicap.
12. Flat Race, Ladies's Purse (1/4 mile) — Aberdeen.	12. Half Mile Flat, Handicap.
13. Height and Distance Jump — E. Dillon.	13. Sack Race.
14. Flat Race (1 mile) — 1st, Strange ; 2nd, Hancock.	14. 1 Mile Walking, Handicap.
15. Consolation Race — Tempest.	15. 150 Yards Flat, Handicap. (for married men)
16. Visitors' Race — 200 yds. — Grant.	16. Steeple Chase.
17. Flat Race, for Cadets of the Naval College only. 300 yds. — 1st. H. Sakamoto ; 2nd, Kano.	17. Consolation.
18. A Jinrikisha Race, and one between the boats of the Naval College on the Canal.	18. Winner's Stakes.

活習慣をもった人たちであったわけで、競技会はそのようなスポーツ活動の一つの表現形態であった。東京の T. A. A. A. は、横浜よりも遅れて活動を開始しているが、その競技会は、かなり多くの共通性を持つもので、同じ方向に動いていたことは当然であったと言わなければならない。

4) この競技会の参観者の数はかなりの数だったと記されている。これは、海軍兵学寮の競闘遊戯会と同じく出場者が身体と身体運動を展覧し、競技会という形式でのスポーツ文化を日本人に啓蒙する働きをもったことは明らかである。

〔5〕東京アスレチッククラブの競技会

さて、The Japan Weekly Mail 紙の 1877 年 10 月 6 日号²⁸⁾ は、東京アスレチッククラブ (The Tokio Athletic Club) の第 1 回競技会の模様を伝えている。1) 東京アスレチッククラブについてはなんら触れられていないので正確なところは不明だが、参加・出場者の顔ぶれ——F. W. Strange を初め、G. Charlesworth, W. B. Mason, J. Hall など——を見ると、前節で取り上げた東京アマチュアアスレチック協会 (T. A. A. A.) の後身ではないかと考えられる。2) 開催日は、「先週の土曜日」といっているので 9 月 29 日(土)である。3) 場所は海軍兵学校(前年の 1876 年 8 月 31 日海軍兵学寮を改称)前の「戸外グラウンド」となっているので、操練場と思われる。ここに 4 分の 1 マイルのコースを設けた。4) ハリー・パークス公使夫妻が来場し、夫人は競技終了時に賞品授与の役目を果たしている。5) 横浜アスレチック協会 (Y. A. A.) の会員にも競技が開放されたため、賞品も少なからず取られたという。6) 最終の競技、200 ヤード競走は、海軍兵学校生徒のための種目で、10 名の生徒が出場した。この競技会も前年の東京アマチュアアスレチック協会の競技会同様に海軍兵学校(海軍兵学寮を改称)と関係のあることが見られる。

この東京アスレチッククラブの競技会は、翌

年の 1878 年 5 月 11 日(土)にも春季大会を開いたことが The Japan Weekly Mail 紙²⁹⁾ によって知られる。1) 海軍兵学校の「広い操練場」が海軍省から使用が許可され、競技の場となったと記されている。正確には兵学校前の操練場で、これまでと同じ場所だったと見られる。海軍省がやはり好意的に計らっているものと思われる。2) 二つの大きなテントと一つの小さなテントが張られ、旗で華やかに飾られた。これが特別観覧席、演奏台、化粧室 (dressing room) に充てられた。3) 日本海軍軍楽隊が出場して、楽しい音楽を演奏し、会の進行を盛り上げた。4) 婦人も観客席に点在したが、外国人および日本人の役員が多数の海軍兵学校生徒とともにかなりの数の参観者の人だかりの間に配置されていた。5) 東京の警察が派出され、日本人の群衆の秩序を維持し、競技種目が替わるのにもなって移動して縄張りの内側に侵入するのを防止していた。会の終わり近くにはスリ騒ぎも起こったほどである。6) 賞品はベリー夫人 (Mrs. Baily) からおめでとうという言葉をかけられて勝利者に手渡された。受賞者の中には恥ずかしがって、返事の出来ない者もいた。沢山の賞品の中には電信局の職員らの寄贈になる銀に金メッキした美しいカップもあった。

東京アスレチッククラブのこれら両年の競技会の競技種目を表 3 に掲げよう。賞品の提供者・授与者および入賞者の記述は略す。

1) このように両年の競技種目を比較してみると、一部順序を入れ替えたところがあるが大部分の種目は同じであることが分かる。1877 年の 1 マイル競走が 1878 年では 1 マイル競歩に替わっている。そして、1877 年にあった二人三脚が 1878 年になくなっている。これは、実はプログラムにあったのが急に取りやめになり、代わって既婚者・参観者出場の 12. 100 ヤード競走が行われたのである。こうした相違点が見出せるが、両年とも海軍兵学校生徒が参加して競技会の開催に協力し、200 ヤード競走に出場している。こうして見ると、東京アスレチッククラブの競技会は、海軍省の好意を受けながら海軍兵学校との密接な関係をもって開催されたも

表3 東京アスレチッククラブの競技会種目

1877年	1878年
1. Flat Race, 100 Yards. Handicap.	1. Flat Race, 100 Yards. Handicap.
2. Throwing the Cricket Ball. Handicap.	2. Throwing the Cricket Ball. Handicap.
3. Throwing the Hammer, 16 lbs. Handicap.	3. Throwing the Hammer, 16lbs. Handicap.
4. Pole Jump. Handicap.	4. Flat race, 150 Yards. Handicap.
5. Flat Race, 150 Yards. Handicap.	5. Long Jump. Handicap.
6. Long Jump. Handicap.	6. Putting the Shot, 16 lbs. Handicap.
7. Hurdle Race, 120 Yards, 10 Flights. Handicap.	7. Hurdle Race, 120 Yards. Handicap.
8. Putting the Shot, 16 lbs., Handicap.	8. High Jump. Handicap.
9. Ladies' Purse, 1/4 Mile, for Memmbers only. Handicap.	9. Ladies' Purse, 1/4 Mile. For members only. Handicap.
10. High Jump. Handicap.	10. Pole Jump. Handicap.
11. Flat Race, 1 Mile. Handicap.	11. Hop, Step, and Jump. Handicap.
12. Hop, Step, and Jump. Handicap.	12. One Mile Walking. Handicap.
13. Three Legged Race.	13. Flat Race, 100 Yards. For married men and visitors got up in its place.
14. Cosolation, 200 Yards.	14. Flat Race, 200 Yards. For Cadets of the Imperial Naval Collge.
15. Flat Race, 200 Yards. For Cadets of the Imperial Naval College.	15. Consolation Race, 200 Yards.

のであることが明らかになる。ただし、残念ながら、The Japan Weekly Mail 紙の記事ではこれ以後の状況が不明であり、この競技会がいつまで継続して開催されたのか、東京アスレチッククラブはその後どうなったのかを明らかにすることが出来ない。

2) F. W. ストレンジの活動に注目すると、1877 年はクリケットボール投げ、ハンマー投げ、4 分の 1 マイル競走、1 マイル競走、二人三脚と、多くの種目に出場していることが見られる。1878 年にもクリケットボール投げ、砲丸投げ、4 分の 1 マイル競走、棒高跳び、1 マイル競走と大活躍している。ストレンジは、東京クリケットクラブに所属していた他にも³⁰⁾、すでに指摘されているように横浜でも活躍している³¹⁾。東京・アメリカ艦隊連合チームに属して横浜ベースボールクラブとの試合に出場していること³²⁾、横浜クリケットクラブ³³⁾、横浜アマチュア・アスレチック協会³⁴⁾、横浜ローイングクラブ³⁵⁾などの競技にも参加して、陸上競技以外のスポーツも盛んに行っていたことが見られる。まさに、F. W. ストレンジは、1875 年 3 月来日後東京と横浜の外国人、とりわけイギリス人社会の文化たるスポーツを共有し、それを通じて

の社交を続けていたのである。ここでは、とくに海軍および海軍兵学校との関係の深かった東京アマチュア・アスレチック協会とその後身と見られる東京アスレチッククラブにおいて中心的役割を果たしていたことが重要である。そして、東京におけるそれらの競技会が繰り返して開催されることによって、海軍兵学寮の競闘遊戯とともに東京の官民に Athletic Sports なるものを印象づけ、記憶させていったものと考えられる。

[6] 東京大学の運動会と“OUTDOOR GAMES”

ストレンジの経歴については、すでに考証がなされている³⁶⁾。それによると、東京英語学校（1877 年 4 月東京大学予備門となる）の雇入伺書からストレンジがオックスフォード大学出身であることは間違いないと見られ、また教え子武田千代三郎が語っているイートン校出身というのも信頼されてきたところである。しかし、最近の研究でこれに疑問が投げかけられ、ロンドンのユニバーシティカレッジスクール（Univercity College School）の出身者だった

のではないかという仮説が提出されている⁴⁵⁾。ともあれ、イギリス生まれのストレンジは、その学生生活を通じてスポーツ活動を盛んに行ってきた人であり、来日して間もなく東京・横浜の外人、とくにイギリス人とアメリカ人が多かったと思われるが、それらの人たちと交流し、スポーツを楽しむ生活を送った。それが、前節で取り上げたような東京と横浜のスポーツクラブでの活動として記録に残っているところである。

ところで、ストレンジは一人のイギリス人として自らの生活習慣、文化としてのスポーツを維持し、満足していたに止まらないで、自分の勤務する東京大学の学生たちにスポーツの価値を説き、実際にスポーツの方法(ルール、技術、精神等)を教えたことは、これまでも多くの人によって取り上げられてきている。ストレンジの活動に関して最も信頼出来ると思われるのは、その教え子武田千代三郎の記述であるが、それによるとストレンジが東京・一ツ橋にあった東京大学の運動場に立ったのは、1882(明治15)年の秋頃からであると言われている³⁷⁾。そして、翌1883(明治16)年5月に入った頃から「近々フットレイスやジャンピングのやりっく

らがあるそうだと噂が立ち」、ストレンジが「アスレチックスポオツ」の準備を進めているようであるが、それにもなって学生も練習に取り組みだしたと語っている³⁸⁾。そして、土曜の午後加藤弘之総理はじめ教授・学生一同が講堂に集合したところでストレンジは運動の意義、スポーツの価値を説く大演説を行って、次の土曜日にいよいよアスレチックスポーツが開催された。その日付は、武田によると1883(明治16)年6月16日ということになる。そして、武田の記憶を再生したものによるとと思われるが、当日のプログラムを雑誌に掲載している³⁷⁾——プログラム中の順序には一部記憶違いがあるかも知れない、と断っている——。それを表4に掲げよう(英文表記は原文のまま引用)。なお、さきのストレンジの運動に関する講演があった少し前に、ストレンジは学生にスポーツの方法を教えるために丸善から英文の“OUTDOOR GAMES”の書を出版していた。これは、学生に割引で販売もされたが、またアスレチックスポーツ開催時には沢山寄贈されてその賞品として学生に与えられたものでもある。本文55ページの冊子の中にアスレチックスポーツの項があるので、実際のアスレチックスポーツにおける

表4 1883年東京大学の競技種目と“OUTDOOR GAMES”の種目との比較

1883年東京大学の競技種目	“OUTDOOR GAMES”の種目
1. 100yd Race. Trial Heats. 1 p. m.	1. 100 YARD RACE. (200 yards, 1/4 mile, 1/2 mile)
2. Throwing the Cricket Ball.	2. HIGH JUMP.
3. 100yd Race. Final.	3. LONG JUMP.
4. High Jump.	4. HOP STEP AND JUMP.
5. 220yd Race. Trial Heats.	5. POLE JUMP.
6. Long Jump.	6. THREE-LEGGED RACE.
7. 220yd Race. Final.	7. CONSOLATION RACE.
8. Putting the Shot.	8. THROWING THE CRICKET BALL.
9. 440yd Race.	9. PUTTING THE SHOT.
10. Hurdle Race. Trial Heats.	10. THROWING THE HAMMER.
11. Throwing the Hammer.	11. HURDLE RACING.
12. Hurdle Race. Final.	
13. Pole Jump.	
14. 880yd Race.	
15. Consolation.	
The prizes will be distributed after the sports are over.	

競技種目と比較するため、これを右欄に掲げること⁴⁰⁾にしよう⁴⁰⁾。

このように両者を比較してみると、三段跳び、二人三脚は実施されなかったようであるが、あとは徒競走の距離の違いを除けば殆ど“OUTDOOR GAMES”が挙げていた種目を実施したことが分かる。そして、東京大学のプログラムを1876（明治9）年の海軍兵学校のプログラムと比較してみると、二人三脚、綱引き、豚の尻尾つかみ競争といったような娯楽的種目が殆ど姿を消し、時間、距離を競う数量主義、記録主義の近代陸上競技が成立する方向において構想されたものと云えよう⁴¹⁾⁴²⁾。それは、ストレンジが自ら参加した横浜・東京の外人スポーツクラブのathletic sportsの進化の方向に沿ったものであった。これがこの後東京大学・帝国大学の秋季陸上運動会として発展し、さらにその後一大学の枠を越えた陸上競技大会が開催されるまでの間陸上競技を日本に定着させ、生育していく苗床となったということが出来る。まさに、ストレンジは海軍兵学寮の競闘遊戯会と東京大学の陸上運動会をつなぐ媒介者の役割を果たした人と云えるのである。また、このときただ単にイギリス流の競技種目と競技会の形式が移入されたと言うだけでなく、その競技会の組織と運営の方法が導入されたことを意味するものであったことに注目しなければならない⁴³⁾。

一方、海軍兵学寮の競闘遊戯会に見られた競技種目の中で排除されていった種目、すなわち二人三脚、目隠し競走、負ぶい競走、水運び競走、卵拾い競走、綱引きなどの偶然性、不確定性を有する競技ないし団体競技は、やがて学校体操の成果を展覧し、同時に体育運動の啓蒙・普及の運動を展開するものとしての体操大演習会⁴⁴⁾・連合運動会において取り上げられ、後に学校単位運動会において不可欠の種目に位置づけられていくことになる。この体操大演習会の方向におけるこれらの競技種目の採用された時期には、東京にまだ海軍兵学寮競闘遊戯会から東京アマチュアスポーツ協会・東京アスレチッククラブの競技会におけるこれらの種目の記憶が残っていたであろうことは考えられるところで

ある。

〔7〕 結 語

本研究は、日本の運動会の成立過程に関して、その初期における海軍兵学寮の競闘遊戯会から東京大学の運動会につながる系譜的な関係を明らかにすることを課題とした。

研究の結果、以下の点を明らかにすることが出来た。

- 1) 海軍兵学寮では1874（明治7）年3月初めて競闘遊戯会を開いた後、1876（明治9）年4月にも競闘遊戯会を開催した。会場は、兵学寮前の操練場であった。
- 2) イギリス人教官と共に日本人教官も世話役となり、種目にも剣術が加えられるなどして、一部日本化が見られた。大部分の競技種目は前回と同様であったが、目隠し競走、水運び競走、卵拾い競走など、偶然性、不確定性が左右する娯楽性の濃い競技種目が減少していた。
- 3) 海軍兵学寮が1876年に競闘遊戯会を開催したと同じ場所、すなわち海軍の操練場で外人スポーツクラブである東京アマチュアアスレチック協会、そしてその後身と思われる東京アスレチッククラブが1876-8年に競技会（アスレチックスポーツ）を開催している。これについては、操練場の使用許可、海軍軍楽隊の出場、海軍兵学寮（兵学校）生徒の出場・競技参加などの点から、海軍省および海軍兵学寮（兵学校）との密接な、支援と言えるような関係のあったことが見られる。
- 4) この東京の外人スポーツクラブに所属し、そこで中心的に活動した人にF. W. ストレンジがいる。ストレンジは、横浜の種々のスポーツクラブでも活動したのだが、そうした外人のクラブでの組織・運営と自ら選手としての経験とをもって、後に東京大学でのアスレチックスポーツ（後陸上運動会と呼ばれる）開催のために働いたのである。
- 5) 東京大学のアスレチックスポーツ開催前に、ストレンジは“OUTDOOR GAMES”の

冊子を刊行し、日本の学生にスポーツの方法に関する知識を与えようとした。東京大学のアスレチックスポーツでは、ほぼこの冊子の‘ATHLETIC SPORTS’の項に挙げられた種目が実施された。しかし、そこに唯一挙げられていた二人三脚が除外されていたように、海軍兵学寮の競闘遊戯会に見られたような偶然性がかかなり結果を左右する、不確定性をもった種目は外人の競技会でも次第に少なくなってきたのと軌を一にして、より速く、より高くを競う近代陸上競技的内容のもので構成されていた。

6) 偶然性、不確定性をもった運動種目は、かえて後の1884年頃から見られる体操伝習所の体操大演習会の方に見出されるようになる。それは、広義の体操に属する「遊戯」の実演ではあったが、この時期の東京にはまだ海軍兵学寮の競闘遊戯会以来の記憶が残っていたことが考えられる。

注および文献

- 1) 日本陸上競技連盟編(1956) 日本陸上競技史, 日本体育社, 1-5.
- 2) 日本体育協会(1958) スポーツ八十年史, 日本体育協会, 125-127.
- 3) 山本邦夫(1970) 陸上競技史, 明治編, 道和書院, 11-49.
- 4) 織田幹雄(1975) 改定新版 陸上競技百年, 時事通信社, 3-7.
- 5) 山本邦夫(1979) 日本陸上競技史, 道和書院, 1-7.
- 6) 佐藤秀夫(1981) 「運動会の史的性格—その軌跡と問題」『演劇と教育』1981年9月号, 5. 同(1981) 「運動会の考現学」『月刊百科』No. 229, 1981年11月号, 9. 同(1987) 「運動会」『最新スポーツ大事典』大修館, 96.
- 7) 今村嘉雄(1967) 十九世紀に於ける日本体育の研究, 不昧堂, 958-968.
- 8) 今村嘉雄(1970) 日本体育史, 不昧堂, 332-339.

- 9) 木村吉次(1996) 「海軍兵学寮の競闘遊戯会に関する一考察」『教育学研究』第36巻第2号, 129-138.
- 10) 今村(1967) 前掲書, 962.
- 11) 同(1970) 前掲書, 334.
- 12) 織田(1975) 前掲書, 3-5.
- 13) 日本陸上競技連盟編(1956) 前掲書, 1.
- 14) 日本体育協会(1958) 前掲書, 125.
- 15) 山本(1970) 前掲書, 13.
- 16) 同(1979) 前掲書, 2.
- 17) 沢鑑之丞(1937) 「我国に於ける Athletic Sports の起源」『有終』Vol. 24, No. 7, 129-134.
- 18) 沢鑑之丞(1942) 海軍兵学寮, 興亜日本社, 249-250.
- 19) 『太政類典』第二編 自明治四年八月至同十年十二月 第二百二十五卷(第四編兵制二十四兵学三止)
- 20) The Japan Weekly Mail, Apr. 8, 1876, 313-314.
- 21) 沢(1937) 前掲論文, 前掲誌, 134.
- 22) 『公文録』海軍省之部, 明治七年三月. 文書番号四.
- 23) The Japan Weekly Mail, Apr. 20, 1876, 450.
- 24) 渡辺融(1973) 「F. W. ストレンジ考」(東京大学教養学部『体育学紀要』第7号, 14) は, ストレンジ(F. W. Strange) 研究に関してすでにこの競技会に言及している.
- 25) Francis Prawse(英国, 工部省電信局雇)の可能性がある(ユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』前出, 391参照).
- 26) The Japan Weekly Mail, Oct. 31, 1874, 894.
- 27) ibid., Oct. 28, 1876, 992-993.
- 28) ibid., Oct. 6, 1877, 881-882.
- 29) ibid., May. 18, 1878, 470-471.
- 30) ibid., Feb., 5, 1881, 126.
- 31) 渡辺(1973) 前掲論文, 14-15.
- 32) ibid., July 16, 1881, 826 and July 23, 1881, 849.

- 33) *ibid.*, Oct. 12, 1878, 1071, Nov. 6, 1880, 1434, Oct. 22, 1881, 1225-6, May 27, 1882, 647, and July 1, 1882.
- 34) *ibid.*, Nov. 1, 1879, 1459-60, and May 8, 1880, 596-7.
- 35) *ibid.*, Oct. 6, 1877, 869, and Oct 11, 1879, 1351.
- 36) 渡辺 (1973) 前掲論文, 10-12.
- 37) 武田千代三郎(1923)「本邦運動界の恩人 ストレンジ師を思ふ(-)」『アスレックス』2巻2号, 11-12.
- 38) 武田 (1923) 同前(二), 前掲誌, 2巻3号, 122-124.
- 39) 同 (1923) 同前, 同前, 128.
- 40) Strange, F. W. (1873) "OUTDOOR GAMES", 丸家善七, (復刻版), ベースボールマガジン社, 1980年刊による, 47-52. ストレンジは,「日本の少年と数年つきあった結果私はこう思いました。日本人の少年は運動場に適当なゲームを全く知らないとは云えないとしても殆ど知らないのだと。これが恐らくはそして多分に何故この国の少年が運動場をあまり使わないかということの理由なのです。」(PREFACE, I-II)と言い, 健康保持のために運動が必要なことを説き,「したがって, 日本人生徒が身体運動をするようにさせるために私はこの小冊子を編んだのです。」(*ibid.* III)と本書発刊の動機を語っていた。
- 41) Melvin Watman (1968) 'History of British Athletics', Robert Hale, 15. M. Watman は「今日我々が陸上競技と認識しているようなスポーツはやっと 100 才になったところであるが……」と述べているように, 近代陸上競技のスタートは 1860 年代に求められている。
- 42) F. A. M. Webster (1929) 'Athletics of To-day', Frederick Warne & Co., 8-15. Webster によると, エグゼター学寮 (Exeter College) が 1850 年に幾分楽しい雰囲気競技会を開くまでは, オックスフォードやケンブリッジ大学でさえも競技会の類のものはなんらなかったのである……」と言い, 1864 年に両大学の第 1 回対抗競技会が開かれたこと, そして, 1866 年の春アマチュア・アスレチッククラブは第 1 回全英選手権大会を開いたと述べている。
- 43) 武田 (1923) 同前(四), 同前, 2巻5号, 15. 武田は,「私共の感服しましたのは, 極めて少数の役員で, テキハキと諸般の準備を終へサッサと夫れを片付けて仕舞ふ其の手際の頗る鮮かさ, 見て居ても気持が良い程であったことです。」とその能率主義に感心して競技会の役員に関する一項を設けて言及していた。
- 44) 『大日本教育会雑誌』第 7 号, 明治 17 年 5 月 31 日, 37. 1884 年 4 月 20 日体操伝習所で開催された「体育会」の春季大演習会では, [第 1] (軽運動) 徒手, 亜鈴, 棍棒等の諸運動, [第 2] フート, ボール(蹴鞠) [第 3] 隻足競走, 隻立競走, 旗拾競走, 綱引 [第 4] ベース, ボール, クロッケー, 弓術, [第 5] 打毬 [第 6] 野試合 [第 7] 打毬 [第 8] 同上等の運動を行っている。確かに, 体操伝習所でも独自に「戸外遊戯法」の調査・研究を行っていて, その実演会という性格をもっていたことは間違いないが, 同時に海軍兵学寮・兵学校の競闘遊戯会以来のアスレックススポーツの記憶も一部下敷きになっていた可能性が考えられる。この大演習会で 1876 年の海軍兵学寮競闘遊戯会に見られような「綱引」や「野試合」(兵学寮では Japanese Fencing と記されていた) が取り上げられている。
- 45) 阿部生雄 (1996) 「F. W. ストレンジの生い立ち——一つの仮説」日本体育学会第 47 回大会号, 136, および発表資料参照。